

ゆうぞら

登録番号：第361号

育成者：金戸橋夫 吉田雅夫 栗原

登録年月日：昭和58年2月24日

昭夫 千葉 勉 西田光夫

登録者：果樹試験場（茨城県つくば市藤本2-1）

京谷英寿 山口正己

来歴：「白桃」と「あかつき」の交雑実生

特 性

■栽培特性

樹姿は若木の間は直立性であるが、結実量が多くなると開張、下垂するようになる。樹勢はかなり強い。花芽の着生は良好で複芽が多い。親の「白桃」に似て、短果枝に良質の果実が安定して結実するので、若木の間は剪定を軽めにし、枝を誘引して開くようにすれば、樹勢が早く落ち着き、早期に良質の果実を安定して生産することができる。盛果期に到達すると、主枝、亜主枝の先端が下垂してくるので、支柱の設置が必要となる。

花は普通咲き、一重で、花卉の色は桃色。「白桃」と異なり、花粉が多く、訪花昆虫が多ければよく結実する。生理的落果は「白桃」より少ないが、年により認められる。若木の間は、長大な枝についた果実は後期落果が多いので、摘果の時期を遅らせたり、程度を軽めにするのが望ましい。生育初期に葉色がやや淡いが、生産力には無関係で収量も多い。

■果実特性

果実はほぼ円形で、果頂部は僅かに凹む。果皮の地色は白色で、陽光面の着色は中位、無袋栽培でも鮮紅色で、暗赤色になることは少ない。果実は、発表当初は1果200g前後で、「白桃」より少し小さかったが、樹齢を重ねた最近では1果300gを超えることも珍しくない。果皮は強じんで剥皮はやや困難である。

果肉は白色で、核周囲には紅色素をかなり生ずる。肉質は緻密でよくしまり、半不溶質に近く、良好である。日持ちもよい。甘味は多く、屈折計示度で13~14度(大果では1~2度低い)。酸味は核周でも少なく、pH4.7程度である。果汁は多く、繊維は少ない。渋味は若干感じられることもあるが、問題になる程ではない。食味は極めて良好である。

核は粘核で、核割れは殆どない。収穫期は「白桃」とほぼ同時期か、少し早い。全面に紅色に着色するので地色での判断は難しく、ややもすると早採りしがちであるので注意したい。もちろん、適期を過ぎると蜜入り果が発生することがあるので、好ましくない。

■病虫害抵抗性

せん孔細菌病にはそれほど強くないので、風当たりの弱い地形を選ぶか、防風柵の設置、殺菌剤の散布が必要である。また、熟期が遅いので、吸蛾類の被害がみられる所では防虫網の設置が必要であろう。

■地域適応性

土壌その他に対する適応性は広く、東北南部(福島、山形)から九州まで栽培可能と思われる。ただし、晩生種のため、台風の常襲地や吸蛾類の多い地帯での栽培は好ましくない。その点、東北南部は他産地との競合がなく、無袋栽培も可能で着色もよく、経済的価値が高く、有望である。ただし、熟期が9月中旬以降になることがあり、秋冷の早い場合には完熟に至らないおそれがある。そのため、標高の高い所での栽培は避ける。晩生ももの代表である「白桃」と比較して着色良好で、品質も劣らず、結実が安定していて、栽培が容易なので、果皮の着色しない品種を望む地域は別として、「白桃」に替る品種と言えよう。

(西田光夫)